

《論 説》

## ホッブズ『リヴァイアサン』の第2自然法は何を意味するのか

新 村 聡

- 1 はじめに
  - 1.1 第2自然法の謎と2回の社会契約
  - 1.2 私的権利設立の社会契約
- 2 ホッブズ権利論の理論構成——「権利の引き算」
- 3 ホッブズの政治思想3部作における第2自然法と第10自然法の発展
  - 3.1 ホッブズ権利論の基本論理
  - 3.2 『法の原理』における2つの自然法
  - 3.3 『市民論』における2つの自然法
  - 3.4 『リヴァイアサン』における2つの自然法
- 4 むすび——社会契約論の2段階論と3段階論

### 1 はじめに

#### 1.1 第2自然法の謎と2回の社会契約

ホッブズが『リヴァイアサン』第14章で述べている第2自然法 (the second Law of Nature) は、自然状態にある人々に対して自然権を放棄する社会契約を結ぶことを命ずるものであり、ホッブズ政治思想の理論的核心を示す文言としてよく知られている。しかしその意味は一読して容易に理解できるものではない。ホッブズは第2自然法について次のように述べている。なお、(1)~(4)の数字は筆者が挿入したものである (以下も同様)。

「人は、(1)他の人々もそうする場合に、(2)そして平和と自己防衛のためにそうすることが必要であると自分が考える限り、(3)すべてのものに対するこの権利を進んで放棄するべきであり、(4)かれが他の人々に対して持つ自由は、他の人々がかれに対して持つことを許せる範囲で満足すべきである。」(Leviathan, 92, 訳(1)218)

第2自然法は4つの部分から構成されている。(1)は自然権の放棄が一方的ではなく相互的に行われる社会契約であることについて、また(2)は自然権を放棄する目的が平和と自己保存であることについて述べており、いずれも意味は明確である。これに対して理解がもっとも困難なのが(3)「すべてのものに対するこの権利を進んで放棄するべきである」の部分である。通説では、この(3)は市民的統治の

設立において各人が自己を統治する権利を主権者に全面的に譲渡する社会契約を意味すると解釈されており、「すべてのものに対する権利を放棄する」とは「すべての権利を放棄する」と同義とみなされている。この通説的解釈の妥当性を検討することが本稿の中心課題である。

第2自然法の最後の構成部分(4)も、正確な意味を理解することは容易ではない。(4)に述べられているのは、自己の自由が他者の自由と等しいという自由の平等である。ホッブズは、(3)で権利について述べ、(4)で自由について述べているので、両者は別個の主題を扱っているように思われるかもしれない。しかしホッブズ自身が、「権利は行ったりさしひかえたりすることの自由に存する」(*Leviathan*, 92, 訳(1)217)と明言しているように、ホッブズ自然法論において権利と自由はほぼ同義語であり、(4)は自分の権利と他者の権利が等しいという権利の平等を意味している。もし通説のように(3)をすべての権利を放棄することとして理解するのならば、直後の(4)で自他における権利の平等を説く理由をどのように考えたらいいであろうか。(3)ですべての権利を放棄した後、臣民は絶対的主権者の下で平等な無権利状態に置かれるという意味であろうか。

(4)についてはさらに奇妙なことがある。ホッブズが『リヴァイアサン』で自己と他者の権利の平等について述べているのは次の第10自然法である。「だれも他のどの人にも留保されることを望まないようなどんな権利も自分自身に留保することを求めないこと」(*Leviathan*, 107, 訳(1)249)。なぜホッブズは自他の権利の平等という同じ内容を、第2自然法(4)と第10自然法で2回くり返して述べたのであろうか。この事実は第2自然法と第10自然法の密接な関係を示すものであるが、そもそも第2自然法と第10自然法はどのような関係にあるのだろうか。

通説のように、第2自然法を市民的統治と主権者の設立として解釈する場合に大きな問題となるのは、ホッブズが『リヴァイアサン』で述べている2つの社会契約の関係である。第1の社会契約は上述のように第14章「第1、第2自然法と契約」で第2自然法として述べられており、第2の社会契約は第17章「コモンウェルスの原因、発生、定義」で次のように述べられている。

「これは……すべての人がすべての人と結ぶ信約によって、1つの同一人格内に形成されるすべての人々の真の統一である。その方法は、あたかもすべての人がすべての人に対して次のように言うかのようなものである。すなわち『私はこの人(Man)または人々の合議体(Assembly of men)を権威づけて、私自身を統治する私の権利を与える(give up)が、それはあなたも同様にあなたの権利をかれに与えてそのすべての行為を権威づけるという条件においてである。』」(*Leviathan*, 120, 訳(2)32-33)

通説では、第1社会契約と第2社会契約は同一のものであり、いずれも市民的統治と主権者の設立を意味すると解釈されている。しかし両者は本当に同一の社会契約であろうか<sup>1)</sup>。これら2回の社会契約は、文面だけを見ても非常に異なっている。第1社会契約は「すべてのものに対する権利」を「放

1) 大多数のホッブズ研究者は2つの社会契約を同一のものと解釈しているが、両者を区別する少数の論者もいる。小林(1995:149)は、「自然法第2条と国家成立過程の記述とを切り離しそれぞれ別なものとして読むことができる」と述べているが、自然法第2条が何を意味するのかについては十分に検討していない。

棄する」契約であり、第2社会契約は「自己を統治する権利」を「個人または合議体」に「与える」契約である。第2社会契約が市民的統治と主権者の設立を意味することは明らかであるが、第1社会契約も同様であろうか。もしそうであるならば、ホッブズはなぜ第2自然法で第1社会契約について説明するときに市民的統治や主権者に一度も言及しないのであろうか。

## 1.2 私的権利設立の社会契約

以上、『リヴァイアサン』第2自然法の通説的解釈をめぐるさまざまな疑問について述べてきた。第2自然法を理解する上で重要な鍵となるのは、『リヴァイアサン』よりも先に書かれた『市民論』の対応する記述である。ホッブズは、自然法について『法の原理』『市民論』『リヴァイアサン』の政治思想3部作で説明している。その中で『市民論』の大きな特徴は、各自然法の正しさを証明するために『聖書』から対応する記述を引用していることである。ホッブズは『リヴァイアサン』第2自然法を『市民論』では「第1自然法」または「第1特定自然法」と呼んでおり、聖書からの引用によって次のように確証している<sup>2)</sup>。

「『すべてのものの共有を廃止せよ』という第1自然法、すなわち『私のもの』と『あなたのもの』の導入に関する法について言えば、私たちはまず第1に『創世記』第13章第8-9節で、アブラハムがロトに言った『私とあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。あなたの前にはいくらでも土地があるのだから、ここで別れようではないか』という言葉から、共有がいかにも平和に反するものであるかを知る。また『私たちのもの』と『他人のもの』の区別に関する法は、聖書の中で他人に対する侵害を禁じているあらゆる箇所によって確証される。たとえば『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない』のような箇所がそれである。というのは、それらの箇所は、すべての人のすべてのものに対する権利が廃止されたことを前提としているからである。」(De Cive, 60, 訳98)

この引用文を見れば、『市民論』第1自然法とそれを継承する『リヴァイアサン』第2自然法に述べられている第1社会契約が共有権の廃止と私的権利の導入を意味しており、市民的統治の設立を意味するものではないことは明らかであろう。第2自然法で述べられている「すべてのものに対するこの権利」とは共有権なのである。

しかしなぜ、各人のすべてのものに対する権利が共有権なのであろうか。共有とは1つのものに対してすべての人が権利を持つことである。第2自然法に言われている、各人がすべてのものに対して権利を持つとは、すべての人がすべてのものに対して権利を持つことと同じであり、そのとき1つ1つのものはそれに対してすべての人が権利を持つのであるから共有されているのであり、したがってすべてのものがすべての人によって共有されているのである。それゆえ、各人のすべてのものに対する権利とは共有権を意味する。そして第2自然法(3)が共有権の放棄を意味するのであれば、直後

2) ホッブズ『リヴァイアサン』の第2自然法の意味を理解する上で『市民論』が重要であることは、太田可夫の古典的ホッブズ研究から教えられた。太田(1972:162)、新村(1994:42)を参照。

の(4)で平等な私的権利の導入について述べられている理由も容易に理解できるのである。

以上、『リヴァイアサン』第2自然法の通説的解釈に対する疑問と、『市民論』を根拠とする新しい解釈について述べてきた。以下では、この仮説を論証するために、第2節でホッブズ権利論の3段階の理論構成を「権利の引き算」として考察し、第3節で『法の原理』『市民論』『リヴァイアサン』の3部作で第2自然法と第10自然法に関する論述がどのように発展してきたかを比較考察する。最後の第4節では、ホッブズの社会契約論の理論構成は通説の2段階論（自然状態→市民社会）ではなく3段階論（第1自然状態→第2自然状態→市民社会）として理解されるべきであることを結論する。

## 2 ホッブズ権利論の理論構成——「権利の引き算」

ホッブズは、すべての人間が自己の生命・身体・自由・財（労働成果、自己保存の必要物）に対して平等な権利を有することを論証するために、「権利の引き算」とも呼ぶべき独創的な方法を考案している。「権利の引き算」は次の3段階の論理によって構成される。

**第1段階（自然状態）** すべてのものに対する自然権（A）が存在する

**第2段階（第2自然法）** 自然権の一部（B）を放棄する社会契約が結ばれる

**第3段階（第10自然法）** 社会契約で放棄されずに留保された権利（ $A - B = C$ ）が排他的私的権利となる

以下では、この3段階について詳しく説明する。出発点の第1段階は、すべての人がすべてのものに対して自然権を有する自然状態である。ホッブズは言う。「《各人は自然的にあらゆるものに対して権利を持つ》人間の状態は各人の各人に対する戦争の状態であり、この場合に各人は自分自身の理性によって統治されており、自分が利用できるもので敵たちから自分の生命を維持するのに助けになりえないものは何もないのだから、そのような状態において、各人はあらゆるものに対して、相互の身体に対してさえ権利を持つ。」（《 》内は原著の小見出し）（*Leviathan*, 91, 訳(1)217）

この自然状態では、すべての人がすべてのものに対して、つまり自分自身の生命・身体・自由・財に対してだけでなく他者の生命・身体・自由・財に対しても権利を持つ。この状態では、本来の権利すなわちそれを侵害しないように他者を義務づける排他的私的権利は存在せず、自己の生命・身体・自由・財はいつでも他者に奪われる可能性がある。

第2段階。人々は、自己保存を実現するために平和の追求と自己防衛を命ずる次の基本的自然法を認識する。「だれでも平和を獲得する希望がある限り平和のために努力するべきであり、平和を獲得できないときには戦争のあらゆる助けと利点を求め利用してもよい。」（*Leviathan*, 92, 訳(1)217）この基本的自然法から上述の第2自然法が導かれ、人々はすべてのものに対する自然権を相互に放棄する社会契約を結んで、平等な排他的私的権利の社会制度を人為的に設立するのである。

ホッブズは、第2自然法で、すべてのものに対する権利を放棄するように述べた後、放棄すること

はできず各人に留保される権利について次のように述べている。

「人は、自分の生命を奪おうとして力づくで襲いかかる人々に対して抵抗する権利を放棄することはできない。……同じことは、傷害、鎖、投獄の場合にもいえる。……そして最後に、このような権利の放棄または譲渡が行われる動機および目的は、自分の人身の安全、すなわち生命の安全と生活に飽くことのないように生活を維持する手段を確保することにある。」(Leviathan, 93, 訳(1)221)。

つまりすべてのものに対する自然権を相互に放棄するときに留保されるのは、(1)自己の「生命」に対する権利、(2)「傷害」に抵抗して守られる身体への権利、(3)「鎖、投獄」に抵抗して守られる自由への権利、(4)「生活に飽くことがないように生活を維持する手段」すなわち財への権利である。

したがって、第2自然法が意味することは、各人が本来持っているすべてのものに対する自然権(A)から、他者の生命・身体・自由・財に対する自然権(B)を相互に放棄することによって、自己の生命・身体・自由・財に対する自然権(A-B=C)を享受することを他者によって妨げられないようにすることである。そのときに、放棄されずに留保される自己の生命・身体・自由・財に対する権利(C)は、その享受を妨げないように他者を義務づけるという意味において社会的に承認された排他的私的権利となる。こうして当初のすべてのものに対する自然権(A)から、社会契約によって相互に放棄される自然権(B)を引き算する結果として、放棄されずに留保される権利(A-B=C)が新たな私的権利として成立するのである。この私的権利は、それを侵害せずに尊重する義務を他のすべての人々に負わせるという点で、語の本来の意味における権利である。自然状態においてすべての人がすべてのものに対して有する自然権(A)は、他者を義務づけることもなく、排他性もなかった。これに対して、「権利の引き算」を行う社会契約によって新たに人為的に形成される権利(C)こそ、侵害しないように他者を義務づける排他的権利であり、語の本来の意味における権利なのである。こうして各人の生命・身体・自由・財に対する平等で排他的な私的権利が成立する。この「権利の引き算」においてもっとも重要なのは、すべてのものに対する本源的な自然権(A)でもなければ、社会契約によって放棄される自然権(B)でもなく、両者の差(A-B=C)つまり放棄されずに留保される権利である。そしてこの留保される権利は、自然権を相互に放棄する社会契約という人為によって初めて成立するのであるから、人為的な権利とみなしうる。社会契約という人々の共同的な社会的行為によって、自然権は人為的権利へ転化するのである。このような、自然権を放棄する社会契約によって人為的権利が社会制度として成立するという見解こそ、ホッブズ権利論の思想的核心である(新村, 1994: 38-44)。

### 3 ホッブズの政治思想3部作における第2自然法と第10自然法の発展

#### 3.1 ホッブズ権利論の基本論理

本稿第1節で、『リヴァイアサン』第2自然法第4構成部分と第10自然法が同じ内容であることを第2自然法の謎として指摘した。この謎を解くためには、ホッブズが自然法について論じている政治

思想3部作を比較考察することが有益である。というのも、『法の原理』『市民論』には『リヴァイアサン』第2自然法と第10自然法の原型となる自然法がすでに簡潔に述べられており、2つの自然法の意味と論理的関係を『リヴァイアサン』よりも容易に理解できるからである。さらに3著作を比較すると、『法の原理』と『市民論』では第2自然法の本文の内部に第10自然法が含まれず、『リヴァイアサン』になって初めて第2自然法の本文の最後に第10自然法が挿入されたことがわかる。ホッブズはなぜそうしたのであろうか。

以下では、3著作の検討に先だって、まずホッブズ権利論を貫く基本論理について整理しておく。これは第2自然法と第10自然法の論理的な関係を理解するための準備作業である。もっとも重要な点は、第2自然法(3)の「すべてのものに対する権利を放棄する」とは、「すべての権利を放棄する」という意味ではなく、「すべてのものに対して権利を持つことを放棄する」という意味だということである。したがって、それは「あるものに対する権利を放棄する」ことまたは「あるものに対する権利を留保する」ことに等しい。この点に留意しつつホッブズ権利論の基本論理を整理すると、以下の4命題になる。( )内は各命題が実質的に意味することである。

- (a) 「すべてのものに対する権利を放棄する」(自己と他者の生命・身体・自由・財に対する権利を持つことを放棄する)
- (b) 「あるものに対する権利を放棄する」(他者の生命・身体・自由・財に対する権利を放棄する)
- (c) 「あるものに対する権利を保持する」(自己の生命・身体・自由・財に対する権利を保持する)  
この命題(c)に「自己と他者の平等」という条件を付加すると次の命題(d)が導かれる。
- (d) 「自己と他者は平等に、あるものに対する権利を保持する」(自己と他者は平等に、各人の生命・身体・自由・財に対する権利を保持する)<sup>3)</sup>

以下では、ホッブズが上記の(a)~(d)を、どこで、どのように述べているかに注目しながら、『法の原理』『市民論』『リヴァイアサン』の3著作における第2自然法と第10自然法の論述を比較検討する。これを通じて、ホッブズ権利論の進化過程とそれを貫く不変の論理構造を明らかにすることが目的である。

なお、『法の原理』には自然法番号がなく、『市民論』は基本的自然法を別に扱っているために自然法番号が『リヴァイアサン』よりも1つずつ小さい。しかし以下では比較の便宜のために『リヴァイアサン』の自然法番号を他の2著作の対応する自然法にも使用する。引用文中の(a)~(d)の記号は筆者が挿入したものである。

### 3.2 『法の原理』における2つの自然法

『法の原理』では、2つの自然法が次のように述べられている。

---

3) ホッブズは、権利の平等を意味するこの命題(d)を、さまざまな形式で表現している。1つは、「自分と同程度に他人も権利を保有することを承認するべきである」という他者権利の承認論であり、もう1つは「他人と同程度に自分も権利を保有することに満足するべきである」という自己規制論である。さらに後者は、「他人に与えられることを望まないものを自分が求めるべきではない」(*Leviathan*, 107, 訳(1)250)という否定文でも表現されている。



### (第2自然法)

「(a)自然法の1つの戒律は、『すべての人は、自分が生まれながらに持っているすべてのものに対する権利を放棄すること』である。」(*Elements*, 82, 訳1243) (『 』内は原文イタリック, 以下も同様)

### (第10自然法)

「(a)人はすべてのものに対する自分の権利を保持するべきでないということが必然的であったように、(c)人はいくつかのものに対する自分の権利を保持するべきである。自分の身体に対する権利、(たとえば)身体を防衛する権利はそうであって、譲渡することはできない。また、火、水、無償の空気、住む場所を使用する権利、生活に必要なすべてのものに対する権利も譲渡できない。そしてまた、自然法は、平和を失うことなしには保持できない権利以外の他の権利の放棄も命じない。われわれが互いに平和の状態に入るときにそのように多くの権利が保持されるということを見れば、(d)理性と自然法は『ある人が保持することを必要とするどのような権利であれ、その人はすべての他者が同じ権利を保持することを許さなければならない』ということをも命じる。」(*Elements*, 93-94, 訳1263-1264)

以上の『法の原理』の叙述を記号で表現すると、第2自然法の本文が(a)、第10自然法の説明文が(a)(c)で本文が(d)である。ここに示されているホッブズの論理は、(a)の権利放棄論から出発して(c)の権利保有論をへて(d)の権利平等論を導出すること、すなわち(a)→(c)→(d)である。ホッブズは(a)から(c)を直接に導出しており、論理的な中間項(b)が欠落している点は、以下で検討する『市民論』や『リヴァイアサン』と異なる。

この『法の原理』の記述で注目すべき点は、命題(a)が2回出てくることが、すなわち第2自然法(a)が第10自然法の記述(a)(c)(d)の最初に反復して述べられていることである。おそらくホッブズは、2つの自然法の密接な関係を示すために(a)を反復したのであろう。

また、命題(a)の表現が、第2自然法の「すべてのものに対する権利を放棄する」から第10自然法の「すべてのものに対する権利を保持するべきでない」に変更されている点も注目に値する。ホッブズはおそらく後者のほうが「すべての権利を放棄する」と誤解される余地が少ないと考えたのであろう。

## 3.3 『市民論』における2つの自然法

『市民論』では、第2自然法と第10自然法の原型となる自然法が次のように述べられている。なお既述のように本稿では『リヴァイアサン』の自然法番号を用いるが、『リヴァイアサン』第10自然法は『市民論』では第9自然法(自然法の第9の命令)と呼ばれていることに注意されたい。

### (第2自然法)

「基本的自然法から派生する自然法の1つは、『(a)すべての人のすべてのものに対する権利は保持されるべきでなく、(b)いくつかの権利は譲渡されるか、または放棄されなければならない』というものである。」(*De Cive*, 34, 訳52)

### （第10自然法）

「(b)各人の保存のために、自己のいくつかの権利を放棄することが必要であったように、(c)各人の保存のために、いくつかの権利を保持することも同じく必要である。この保持する必要があるいくつかの権利とは、身体を守る権利と、無償の空気、水、その他の生存に必要な一切のものを享受する権利である。したがって、平和状態に入る人々は、多くの共有権（common rights）を保持しつつ、多くの私的権利（personal rights）を獲得するので、(d)自然法の第9の命令、すなわち『各人が自分自身の権利として要求する権利は何であれ、同じ権利を他のすべての人にも許さなければならない』という命令が生ずる。」（*De Cive*, 50, 訳81）

以上の『市民論』の叙述を記号で表現すると、第2自然法の本文が(a)(b)、第10自然法の説明文が(b)(c)で本文が(d)であり、これらをまとめると、ホッブズの論理は(a)→(b)→(c)→(d)となる。

『法の原理』では(a)から(c)が直接に導出されていたのに対して、『市民論』では途中に(b)が挿入されており、また第2自然法本文(a)の表現も「放棄する」から「保持するべきでない」へ変更されている。これら2つの変更によって、(a)が「すべての権利を放棄する」と誤解される余地は完全になくなっている。

『市民論』で注目すべきもう1つの点は、ホッブズが第2自然法の末尾の(b)を第10自然法の説明文の冒頭で反復していることである。ホッブズは、『法の原理』と同様に、2つの自然法の密接な関係を示すために(b)を反復したのであろう。

### 3.4 『リヴァイアサン』における2つの自然法

『リヴァイアサン』の第2自然法と第10自然法にはすでに何回か言及したが、以下では論理的関係を明確にするために、自然法の本文だけでなく説明文の一部も引用する。

#### （第2自然法）

「人々に平和への努力を命ずるこの基本的自然法から引き出されるのは、次の第2の法である。『人は、(1)他の人々もそうする場合に、(2)そして平和と自己防衛のためにそうすることが必要であると自分が考える限り、(3)(a)すべてのものに対するこの権利を進んで放棄するべきであり、(4)(d)かれが他の人々に対して持つ自由は、他の人々がかれに対して持つことを許せる範囲で満足すべきである。』」（*Leviathan*, 92, 訳(1)218）

「『すべての権利が移譲可能ではない』(c)したがって、だれも、どんな言葉または他のしるしによっても、それらの権利を放棄したとか譲渡したとか理解されることができないいくつかの権利がある。人は、自分の生命を奪おうとして力づくで襲いかかる人々に対して抵抗する権利を放棄することはできない。……同じことは、傷害、鎖、投獄の場合にも言える。……そして最後に、このような権利の放棄または譲渡が行われる動機および目的は、自分の人身の安全、すなわち生命の安全と生活に飽くことのないように生活を維持する手段を確保することにある。」（*Leviathan*, 93, 訳(1)220-221）。



### (第10自然法)

「もう1つの法[第10自然法]がこの法[第9自然法]に基づいている。『平和の状態に入るにあたって、(d)だれも、他のどの人にも留保されることを望まないようなどんな権利も、自分自身に留保することを求めないこと』。

平和を求めるすべての人々にとって、(b)いくつかの自然権(certain Rights of Nature)を放棄すること、(a)すなわちかれらが欲するすべてを行う自由を持たないことが必要であるように、(c)いくつかの権利を留保することが人間の生活にとって必要である。その権利とは、自分自身の身体を統治する権利、空気、水、運動、ある場所から他の場所へ移動する道路を享受する権利、そしてそれがなくては人間が生きていくことができないかまたはよく生きる(live well)ことができないようなすべてのものを享受する権利などである。(d)この場合に、もし平和を作るにあたって、人々が、他人に与えられることを望まないものを自分たちは求めるとすれば、かれらは自然的平等(naturall equalitie)の承認を命令する先行の自然法[第9自然法]に反することをするのであり、したがって自然法に反する。』(Leviathan, 107, 訳(1)249-250)

以上の『リヴァイアサン』の叙述を記号で表現すると、第2自然法の本文が(a)(d)、説明文が(c)、第10自然法の本文が(d)、説明文が(b)(a)(c)(d)である。ここに示されているホッブズの論理はややわかりにくい、(a)から(d)を導出することが基本線となっていることは明らかであり、また論理的中間項である(b)(c)が明示的に述べられていることも注目に値する。したがって全体の論理を整理して表現するならば、(a)→(b)→(c)→(d)となる。

この『リヴァイアサン』の叙述で注目すべき点は、ホッブズが第2自然法の本文を『市民論』の(a)(b)から『リヴァイアサン』の(a)(d)へ変えたことである。その結果として、第10自然法(d)が3回くり返して述べられている。3回とは、第2自然法の本文(a)(d)の最後、第10自然法の本文(d)、第10自然法の説明文(b)(a)(c)(d)の最後、である。

ではホッブズは、『リヴァイアサン』において、なぜ第2自然法の本文を(a)(b)から(a)(d)へ変えたのであろうか。言いかえれば、ホッブズはなぜ第2自然法の一構成部分として第10自然法(d)を組み入れたのであろうか。

ホッブズの意図は、『法の原理』『市民論』『リヴァイアサン』のいずれにおいても、2つの自然法に関連させて論じながら、平等な権利の成立を示すことにあったと考えられる。ホッブズは、第2自然法で自然権の放棄について述べ、第10自然法で放棄されずに留保される権利の平等を示すことによって、両者を一体として平等な権利の成立を論証しようとしたのである。そしてかれは、『リヴァイアサン』において、2つの自然法の密接な関係を示すもっとも確実な方法を採用するに至った。それは第2自然法の本文の最後の構成部分として第10自然法を挿入することだったのである。

またホッブズは、これまで検討してきたように、『法の原理』と『市民論』において、第2自然法と第10自然法の密接な論理的関係を示すために、第2自然法の末尾と第10自然法の冒頭で同じ命題を反復して述べていた。おそらくホッブズは『リヴァイアサン』でも同様に考えたのであろう。しかも前2著に比べて、『リヴァイアサン』では2つの自然法の間にさし挟まれている他の記述の分量が非

常に増えており、2つの自然法の関係が見失われる危険性ははるかに大きくなっていた。それゆえホッブズは、2つの自然法の論理的関係(a)→(d)を第2自然法の本文の内部に組み入れることによって、2つの自然法の密接な関係を明示しようと意図したのではないかと推測される。

これまで述べてきた要点をまとめておこう。3著作における2つの自然法の論理を整理すると、『法の原理』は(a)→(a)(c)(d)、『市民論』は(a)(b)→(b)(c)(d)、『リヴァイアサン』は(a)(d)→(d)(b)(a)(c)(d)である。注目すべき点は2つある。第1に、どの著作でも、第2自然法の起点は(a)であり、第10自然法の結論は(d)である。つまり(a)→(d)は、ホッブズの3著作すべてに共通する基本論理である。ホッブズのもっとも重要な理論的課題は、(a)から出発して(b)(c)をへて(d)命題を結論として導出することであったと考えられる。

第2に、ホッブズは、どの著作でも第2自然法の記述の末尾と第10自然法の記述の冒頭で同じ命題を反復している。『法の原理』では(a)、『市民論』では(b)、『リヴァイアサン』では(d)である。この反復によって、2つの自然法の密接な関係が容易に理解できるようになっている。

#### 4 むすび——社会契約論の2段階論と3段階論

本稿の第1節で述べたように、通説では『リヴァイアサン』の第14章と第17章に述べられている2回の社会契約はいずれも市民的統治の設立を意味するものと解釈され、その結果として、ホッブズ社会契約論の基本的理論構成は、「自然状態→社会状態（市民社会）」という2段階論として理解されてきた。しかし本稿が論証してきたように、『リヴァイアサン』第14章の第2自然法で述べられている第1社会契約は私的権利の制度の設立を意味するものであり、第17章に述べられている市民的統治の制度の設立を意味する第2社会契約とは区別されるべきものである。

第2自然法における第1社会契約をこのように解釈するならば、市民的統治の設立に先立つ自然状態は、第1社会契約によって前期と後期に2分されることになる。それぞれを第1自然状態（または前期自然状態）と第2自然状態（または後期自然状態）と呼ぶならば、ホッブズ社会契約論の基本的理論構成は、「第1自然状態→第2自然状態→市民社会」という3段階論として理解されるべきなのである。

なお念のために付言すると、ホッブズは社会契約論を仮説的方法によって論理的に構成している（Gauthier, 1969）。したがって第1と第2の自然状態の区別は論理的なものであって歴史的・時間的な先後関係を意味するものではない。もし人々が私的権利も市民的統治も存在しない第1自然状態にあると仮定するならば、人々は平和と自己保存を実現するために、第1社会契約によって私的権利の制度を設立して第2自然状態へ移行し、さらに第2社会契約によって市民的統治の制度を設立して市民社会へ移行するであろう、という意味である。

ホッブズ社会契約論をこのような3段階論として理解することは、17-18世紀にはとくに珍しいことではなかった。ホッブズから大きな理論的影響を受けたとされる17世紀のプーフェンドルフと18世紀のヒュームは、かれらの社会理論において私有権の設立と市民的統治の設立に関する2回の合意（convention）を区別している。

他方、ロックは私有権が歴史的に形成されるとは考えなかったで、かれの理論には第1自然状態が存在せず、第2自然状態が唯一の自然状態である。つまり「自然状態→社会状態」という2段階論は、ロックに固有な理論構成なのである。したがってホブズとロックを比較する場合にはとくに注意を要する。ホブズの通説的解釈では、自然状態として第1自然状態だけが考慮されており、「第1自然状態→社会状態」という2段階論が想定されており、これとロックにおける「自然状態→社会状態」という2段階論とを比較すると、ホブズの第1自然状態とロックの自然状態との大きな差異が強調されやすい。しかし、ロックの自然状態はホブズの第1自然状態よりもむしろ第2自然状態と比較されるべきである。なぜなら、ロックの自然状態とホブズの第2自然状態とはいずれも自然法と私有権が存在する状態であり、基本的な特徴に大きな差異は存在しないからである。ホブズとロックの理論的差異は、両者の自然状態の差異ではなく、ロックの理論にはホブズの第1自然状態に対応する段階が存在しないことに求められるべきであろう。

同様の問題は、ホブズだけでなくプーフENDORFやヒュームとロックを比較する場合にも生ずる。というのは、プーフENDORFとヒュームの場合にも、私有権の導入以前の自然状態と私有権の導入以後の自然状態とが区別されており、どちらの自然状態をロックの自然状態と比較するかによって、ロックとの距離は大きくも小さくも見えるからである<sup>4)</sup>。

## 参 考 文 献

- Bobbio, N., 1993, *Thomas Hobbes and the Natural law tradition*, (Gobetti, D., trans.), The University of Chicago Press.  
 Boonin-Vail, D., 1994, *Thomas Hobbes and the Science of Moral Virtue*, Cambridge University Press.  
 Gauthier, D.P., 1969, *The Logic of Leviathan: The Moral and Political Theory of Thomas Hobbes*, The Clarendon Press.  
 Hobbes, T., [1640] 1994, *The Elements of Law Natural and Politic*, Gaskin, J.C.A. (Ed.), Oxford U.P. (伊藤宏之、渡部秀和訳『哲学原論 自然法および国家法の原理』柏書房、2012年)(本文中で*Elements*と略記)  
 —, [1642] 1998, [*De Cive*], *On the Citizen*, Tuck, R. and Silverthorne, M. (Eds.), Cambridge U.P. (本田裕志訳『市民論』京都大学学術出版会、2008年)(本文中で*De Cive*と略記)  
 —, [1651] 1996, *Leviathan*, Tuck, R. (Ed.), Cambridge U.P. (水田洋訳『リヴァイアサン』(1)~(4)、岩波文庫、(1)(2)改訂版、1992年)(本文中で*Leviathan*と略記)  
 Strauss, L., 1952, *The Political Philosophy of Hobbes: Its Basis and its Genesis*, (Sinclair, E. M., trans.), University of Chicago Press. (添谷育志、谷喬夫、飯島昇蔵訳『ホブズの政治学』みすず書房、1990年)  
 Tuck, R., 1989, *Hobbes*, Oxford U.P. (田中浩・重森臣広訳『トマス・ホブズ』未来社、1995年)  
 Zagorin, P., 2009, *Hobbes and the Law of Nature*, Princeton U.P.  
 梅田百合香、2005、『ホブズ 政治と宗教——『リヴァイアサン』再考』名古屋大学出版会。  
 —, 2010、『甦るリヴァイアサン』講談社。  
 太田可夫、1971、『イギリス社会哲学の成立と展開』社会思想社。  
 川添美央子、2010、『ホブズ 自然と人為——自由意志論争から政治思想へ』創文社。  
 小林弘、1995、「ホブズの自然法第1条と第2条について」『英米文化』(25)、139-153。  
 高野清弘、1990、『トマス・ホブズの政治思想』お茶の水書房。  
 田中浩、1994、『ホブズ研究序説：近代国家論の生誕』改訂増補版、お茶の水書房。  
 新村聡、1994、『経済学の成立——アダム・スミスと近代自然法学』お茶の水書房。

4) ホブズとプーフENDORF、ロック、ヒュームらとの関係について、詳しくは新村(1994)の第1章と第5章を参照。

——, 2011, 「D.ヒュームとA.スミスの社会契約論批判と統治原理論」, 佐々木武・田中秀夫編著『啓蒙と社会——文明観の変容』京都大学学術出版会, 第10章。

藤原保信, 1974, 『近代政治哲学の形成——ホッブズの政治哲学』(『藤原保信著作集 第1巻 ホッブズの政治哲学』新評論, 2008年)

藪本沙織, 2009, 「ホッブズ道徳哲学における自然法」『実践哲学研究』(32), 37-78。

## The Meaning of the Second Law of Nature in Hobbes's *Leviathan*

Satoshi Niimura

### Abstract

The purpose of this paper is to consider the true meaning of the Second Law of Nature in Hobbes's *Leviathan*. He states that the Law commands everyone to abandon the natural right to all things. What does this mean? Most commentators interpret that he argues about the origin of civil governments; however, this paper insists that in reality his argument concerns that of personal rights. To demonstrate this, the paper focuses on the relationship between the Second and Tenth Laws, as the latter evidently concerns personal rights. After examining the evolution of these two laws in Hobbes's three books on politics, *Elements of Law*, *De Cive* and *Leviathan*, three facts can be revealed. First, the close relationship between the two laws is very clear in all the three books. Second, the meaning of the Second Law is the most clear in *De Cive*, wherein Hobbes argues that people should abandon common rights and acquire personal ones. Third, Hobbes repeats almost the same phrase concerning personal rights in the Second and Tenth Laws in *Leviathan*. These three facts demonstrate that both the Second and Tenth Laws concern the origin of personal rights.